

# ラッセル『教育論』の一考察

## －幼児期の道德教育を中心に－

北岡 宏章・東 千世子

### A Study on Bertrand Russell's "On Education" － Focusing on His Ideas of Moral Education in Infancy －

Hiroaki KITAOKA, Chiseko HIGASHI

#### I はじめに

今日、少子化の進展や就業を希望する母親の増加など様々な社会変化の下で、幼児教育の在り方が大きく変わろうとしている。とはいえ、教育基本法改正の中で改めて確認されたように、幼児教育がその後の教育全般の基礎であることには誰も異論がないであろうし、幼児教育が、遊びを中心に、生活を通して、その後の人間としての「生きる力」の基盤を形作るべきであるということも、幼児教育関係者にはほぼ共通した認識であると言うことができよう。ただ、その「生きる力」をどのように捉えるのかという点になると、文部科学省の見解も、「生きる力」を言い始めた当初と比べると、重点の置き方に変化が見られ、その内容に関し、必ずしも十分説得的な説明ができていないように思われる<sup>1)</sup>。

ここで取り上げるラッセルの『教育論』(“On Education”, 1926)<sup>2)</sup>は、子どもの誕生と共に始まる養育から青年期の大学教育に至るまでの広範な教育を対象として考察しているが、その中心をなすのは、第2部「性格の教育」である。その際、「子どもが6歳になるまでには、道德教育はほぼ完成していなければならない。すなわち、後年必要になるそれ以上の徳性(virtues)は、すでに身につけているよい習慣と、すでに刺激を受けた向上心(ambition)の結果として、少年少女が自発的に伸ばしていくべきものである<sup>3)</sup>」と述べていることから分かるように、幼児期の道德教育がその中心に置かれている。学齢に達してからの教育については、幼児期に基礎作りのできた道德的基

盤に立って、自分の外の世界や人々に対し興味を広げ、知識を獲得し知性を伸ばしていくと共に、そうして得られた知識や知性が、翻って幼児期に作られた道德的基盤を更に発展させていくことになる。こうしたラッセルの教育観は、幼児期に獲得すべき「生きる力」とは何であるのかという問いに対するひとつの明確な回答となっており(もともと、ラッセル自身が直接「生きる力」という言葉を使っているわけではないが)、その結果、幼児教育が教育全体において占める位置や意義の説明にある程度成功しているように思われる。ラッセルの『教育論』は、今日大きな変化の波に晒されている幼児教育が向かうべき方向を考え、様々な改革の提案の妥当性を検討するうえで、ひとつの試金石の役割を果たしてくれるのではなかろうか。

こうした問題意識に立って、出版後約1世紀を経て既に古典の範疇に属するラッセルの『教育論』を、今日の幼児教育が抱える問題を念頭に改めて読み直し、その現代的意義を考察していくことにする。本稿は、教育思想・教育史の研究に携わってきた北岡と、幼児教育の実践に取り組んできた東が、同じ職場で保育者を目指す学生達の教育に関わることになったのをきっかけに、ラッセル『教育論』の思想としての意義と幼児教育の現場での妥当性・有効性を共に検討したことのささやかな産物である。

#### II 幼児教育以前

##### 1. 生後1年目

先にも触れたように、ラッセルは幼児期の性格形成・

道徳教育の問題を自らの教育論の中心に置いているが、その考察を、従来は教育の埒外にあると考えられていた生後一年目における子どもの育ちから始めている。というのも、ラッセルは、この時期に、習慣形成のうえで掛け替えのない重要性を認めるからである。生まれたときには反射作用と本能しか持っていない新生児が、外界への適応の中で、生後短期間に様々な習慣を形成し獲得していく。その典型的な例としてラッセルが挙げるのが授乳である。空腹の辛さで泣いていた新生児は、泣くと乳が与えられることを覚えるや、今度は泣いて乳を要求するようになるのである。ところが、こうした乳児期の習慣形成の問題が十分意識されず、母親（や乳母）は赤ん坊に何が必要かを知っているはずだとの伝統的な考えから、養育の最初の段階が個々の母親の好みや偶然の選択に久しく委ねられてきた。また、親をはじめとする周りの大人は、赤ん坊を可愛がる余りに、不必要に、また、泣いたときには泣き止まそうとして、抱き上げたり、あやしんだり、ゆすったり、歌って聞かせたりしがちである。もちろん、ラッセルはそうしたことのすべてを否定するものではないが、その中でどのような習慣が形成されるのかを、母親や養育に当たる者は自覚して行なわなければならないと考える。大人でなら我慢のならない行動も、赤ん坊がすれば可愛らしく感じられることもある。しかし、そうした行動が習慣化すると、大きくなって苦労するのは本人である。赤ん坊をけっしてベットのようにならぬ可愛がってはならない。すでにこの時期から「未来の大人」と考えて取り扱うべきである。ラッセルは、「最初の習慣がよいものであれば、のちになって無数の面倒が省かれる。その上、ごく早くから身につけた習慣は、後年、まるで本能のように感じられるものである」<sup>4)</sup>と述べて、早期の意識的な習慣形成の重要性に言及する。これはつまり、「外からのしつけ」を最小限にし、習慣を通じての「内からの自律」を可能にするということである<sup>5)</sup>。それゆえ、乳児期の習慣形成を通じて、道徳的に望ましい性格の基盤を作り上げることが、この時期の養育の課題となる。

ラッセルの示す乳児の扱いの原則や考え方を六つに分けて概観しよう。ただし、これらは、それぞれが独立しているのではなく、相互に密接につながりあっている。

第一に、この時期にあっては、健康によいことと性

格によいことは、おおむね同一の方向を向いている（つまり、二律背反にはならない）ということである。ラッセルは、授乳を例に、乳は一定の時間を隔てて与えなくてはならないと言う<sup>6)</sup>。健康の点から、授乳は消化にかかる時間を考慮して行なわなければならないが、そうすることが、性格形成にとっても適切である。というのも、泣けばすぐに与えていると、乳児は、泣いて要求することを覚え、延いてはひとを従わせるために泣くという習慣を身につけてしまうからである。

第二に、健康に必要なことは何でもしてやらなければならないが、その際、大人の側での配慮を悟らせないようにしなくてはならないということである。つまり、子どもに、自分は大切にされているとか、自分は重要な人間であるなどと思わせないようにしなければならない<sup>7)</sup>。なぜなら、そうした意識を後々まで持ち続けると、外の世界に出たときに、自分の思い通りにならず大きな失望を経験するか、あるいはあくまで我を通そうとして鼻持ちならない人間になるかのいずれかだからである。

第三に、赤ん坊のうちから自発的活動を奨励し、逆に、他者へ要求する態度にはストップをかけるべきことである。大人に無理な要求をすることによってではなく、自分の努力によって獲得する喜びを、小さなうちから子どもに味わわせてやるのがよい<sup>8)</sup>。

第四に、楽しみも、外から大人によって与えられるのではなく、赤ん坊が自分で見つけるようにすべきことである<sup>9)</sup>。それゆえ、生後早くから、赤ん坊は手足を動かし、筋肉を使う機会を与えられなければならない。従来、大人の手間がかからぬよう、おくるみで子どもの手足を体にしっかりと縛り付けておく慣行が行なわれていたが、それは、ラッセルの考えに全く逆行する養育方法である。また、目の焦点を合わせるようにできるようになると、乳児は動くものを目で追って喜ぶ。更に、手足の指を自由に動かせることを発見し、目に見えるものが掴めるようになると、赤ん坊の楽しみは急速に増加する。身体のような機能を働かせ、またそれらを連動させることを覚えていく。「こうした赤ん坊の楽しみは、そのほとんどが、赤ん坊の教育の求めるものに他ならない」。つまり、それらは赤ん坊が健全な成長において順次達成すべき課題であり、健康な赤ん坊はそれらを自ら嬉々として次々と追求して行くのである。その子を可愛がるあまりに、外部から

余計な干渉をして、そうした赤ん坊の自発的発達を妨げてはならないのである。

第五に、赤ん坊の学習を促進する方法についてである。生後二、三ヶ月になると、赤ん坊はひとに対し微笑むようになり、母親との間に社会的関係が成立し始める<sup>10)</sup>。赤ん坊は母親を見ると喜ぶ。更に、生後五ヶ月もすると、母親に褒められたり、認められたりしたいという欲求が生じる。つまり、赤ん坊の教育に当たる者は、極めて有効な教育上の武器を得たことになる。何か困難なことをマスターした際に褒める事で、赤ん坊は更に学ぼうという気になる。ただし、大人は、赤ん坊がやってみたいと思うような簡単な動作を前でやって見せるだけにとどめ、あくまで、赤ん坊が自分でそのやり方を見つけるように仕向けることが大切である。

最後に、生後1年間は、食事、睡眠、排泄などを、決まった手順で、規則正しくさせることと、環境を一定に保つことが重要である。生後1年目の乳児は、慣れないものには何にでも不安を感じるものであり、逆に、周囲の事物が馴染みあるものであることによって、子どもは緊張を免れ、心の安定を得るとともに、認識を学ぶのである<sup>11)</sup>。

## 2. ラッセルの教育目的と生後1年目

ラッセルの教育論における理想の人間像は「自由な世界市民 (free citizen of the universe)」<sup>12)</sup>である。そうした理想的人間をつくる基盤としてラッセルは四つの特徴を挙げている。「活力 (vitality)」、「勇氣 (courage)」、「感受性 (sensitiveness)」、および「知性 (intelligence)」である<sup>13)</sup>。これらは、ラッセルの理想の人間像、つまり教育目的を追求する途上で、部分目的として達成されなくてはならない教育目標だと言いうことができよう。本稿では、考察の対象をラッセルの『教育論』に示された幼児教育についての考え方、分けても性格教育・道徳教育に限定し、こうした教育の諸目標や教育の全体像に関する詳しい考察は別の機会に譲ることにするが、幼児教育と関連する限りにおいて、こうした4つの教育目標の意味には随時触れて行きたい。

ラッセルが教育目標の第一番目に掲げる「活力」は、一般には、精神的というよりも生理的・身体的な特質であるが、ラッセルが活力を重視するのは次のような

理由による。すなわち、活力があれば、生きているというだけで幸福感を感じることができる。活力は喜びを高め、逆に苦痛を小さくしてくれる。また、活力に満ちているおかげで、子どもはさまざまな出来事に興味を持ち、自分の外の世界へ出て行くことが可能となり、その結果、子どもの思考やものの見方が客観性を獲得することになる<sup>14)</sup>。ラッセルは、後に見るように、子どもが大人にあこがれ、力を欲する本能ないしは衝動を、遊びとの関連で論じるが、それを支えるのが活力である。先に、生後1年間においては、健康と性格の発達が同じ方向を向いているということに触れた。規則正しい生活習慣は健康な身体をつくり、活力の基盤をつくと共に、精神的安定をもたらす。大人に要求する習慣ができないようにして乳児の自発的活動を促し、乳児に自らの活力を存分に発揮させ、外界の様々なことがらに興味を持たせ、積極的に外へ向かって打って出る生き方を習慣づけようとする。そうすることは、大きくなった暁には、外界についてのより広範な認識へと導き、思考により高い客観性をもたらし、更には、自分の喜びや自分の生きる意義を、一個人としての枠や限界を超えて考えることを可能とするのである。

### <今日的意義と実践の場から見た問題点>

保育者になりたい学生たちは、まず、「子どもが好き」、「子どもが可愛い」というが、これは、子どもを見れば思わず微笑んでしまう心情を持ち合わせているからである。ラッセルのいう「活力」に満ちた子どもは、自発的に身体の様々な動きを試し、新たな身体機能を獲得することを喜ぶ。保育者志望の学生は、子どものそういった活力に満ちた場面に出会って感動し、保育者の仕事に引きつけられるのである。子どもの活力が、保育者になろうとする学生を魅了し育てるといえる。

ところで、今日、子育てに不安を感じ、自信の持てない親が多い。最悪の場合は、児童虐待につながることもある。そうしたことを防ぐため、保育者は、親が子どもの成長を喜び、自信を持てるように支えることが必要である。生後1年間は、特に子どもの変化や発達が著しい時期である。ところが、経験のない親は、子どもの小さな変化や成長を見逃しがちである。つまり、子どもの成長を喜ぶ機会がそれだけ少ないことに

なる。そこで、現場の保育者は、子どもの小さな変化に気づいたら、これをすぐ親に知らせると共に、その後、大きな変化の（例えば初めて立ちあがりそうだとか、もうすぐ歩きそうだという）予兆があれば、これを予め親に知らせ、子どもの成長の大きな節目を、最初に親が家庭で目にして喜べるよう、配慮し支援するようにしている。

ラッセルは、子どもの世話は十分にしながらも、子どもが自分は大切にされているとか、重要な人間であると思わないようにすべきだと述べている。とはいえ、子どもが親に受容され、愛されていると感じること自体は大切なことである。わがままや過保護は上手に避けながらも、親のみが与えうる無条件な愛を子どもに感じさせることは、忘れてはならないであろう。

### Ⅲ 恐怖と勇気

#### 1. 身体的・感覚的な勇気について

ラッセルが「望ましい性格」の基盤をなすものとして2番目に挙げているのが「勇気」である。ラッセル『教育論』では、「生後1年目」を考察した後、幼児期の性格教育に関し最初に論じているのが「恐怖」の問題である。一般に勇気と恐怖は対極にあると考えられ、勇気とは恐怖を感じないことや、他人が恐れることを平気のできることなどを意味することが多いが、幼児教育において両者はどのように関連しあっているのだろうか。

ラッセルによれば、生後間もない赤ん坊は、大きな物音や落とされるという感覚を怖がるが、そもそも自分では動けず、完全に大人の保護に頼っているため、恐怖心はあまり発揮されない<sup>15)</sup>。その時期が過ぎた生後2年目を、ラッセルは子どもにとってすこぶる幸せな時期だという<sup>16)</sup>。というのも、歩くことと話すことができるようになるからである（加えて、推論の力が発達するのもこの時期からである）。歩き回って様々なものを見たり触れたりできるようになる。目新しい事物と接触し観察することは、子どもに大きな喜びをもたらす。自分でできることが増え、食べられる食物の範囲も広がり、「自分は自由で力がある」という感覚が広がるのである。しかしまた、子どもの行動範囲の広がりには、様々な危険と遭遇し恐怖を感じる機会が増えることを意味する。その際、子どもが恐怖の感情

をむやみに抱かないようにすることが必要であるとともに、明らかな危険に対しては、これを避け得るようにすることが求められる。

ラッセルは、生後2、3年目に生じる新たな恐怖心について検討する。例えば、動物や機械仕掛けのおもちゃなどに対して感じる恐怖心である。こうした恐怖心はどこから生じるのであろうか。ラッセルによれば、本能に由来する恐怖心はきわめて少ない。子どもが他の動物を怖がるのは、多くは大人が自分の恐怖心を示したり話して聞かせたりすることで（ラッセルは *suggestion* と言う）、子どもに同じ恐怖心が容易に伝染する。しかし、一般に、哺乳類の仔は、親が教えない限り、天敵を見ても恐れぬものである<sup>17)</sup>。ただし、幾分は本能に由来する恐怖心もある。その対象は子どもによって異なるが、ラッセルは、影法師や突然開いた傘、あるいは機械仕掛けの玩具を例に挙げている。牛や馬も、突然開いた傘で興奮し、暴走することが報告されている。これらは、「見慣れた世界の中に、新しいものが強烈に割り込んでくるケース」<sup>18)</sup>と説明される。重要なことは、こうした恐怖感を放置しないことである。影を恐がる子どもならば、様々な影をつくって見せて、影がどのように生じるのかを理解させ、むしろそれを楽しめるようにする。機械仕掛けの玩具も、その仕組みを知れば恐くなくなる。まずはこうして恐怖心を取り除くことが必要であるが、更に、この世界に不可思議で恐ろしいものはないのだということや、調べればたいていのことは理解できるということや、小さいうちから体験させ、習慣付けることをラッセルは意図しているように思われる。

ただし、恐れなくてはならないものもある。ラッセル親子はしばしば海辺の断崖近くの家で休暇を過ごしたが、ラッセルの子どもは当初断崖を少しも恐れず、下手をすると真逆さまに墜落しかねなかった。これに対処するのに、ラッセルは、知識を与えることをもってした。皿がテーブルから落ちれば割れるように、人間も断崖から落ちれば、ばらばらになってしまうと話して聞かせた。その後、ラッセルの息子は幾分断崖を恐れ、用心するようになった。これは恐怖心を与えたというよりも、説明することで「合理的な気遣い (*rational apprehension*)」<sup>19)</sup>をもたらしたのである。

ラッセルの勇気（ないしは恐怖の克服）に関する考察は必ずしも完結しているとはいえませんが、幼児教育

ないし教育全般にとって重要な多くの観点を示している。

まず、勇気をどのように考えるかということが重要な問題である。以前は、恐怖を感じないことと理解され、それゆえ、意志の力で恐怖心を押さえつけることが奨励された。特に、英国の貴族階級は、恐怖心を人前で表すことを恥辱と考え、子ども達にもそのように教育した。しかし、ラッセルによれば、抑圧された恐怖心は形を変えて無意識下でうごめき、時に暴発する。戦時下で、敵に対する漠然とした恐怖心から、丸腰の敵国人を背後から撃たせた貴族階級出身の英国人将校の例を挙げている。恐怖心はない方がよい。しかし、恐怖心を意志の力で押さえつけることはできない。ではどうするのか。ラッセルは、「勇気」の定義から再考する。ラッセルによれば、勇気があると言えるのは、恐くて人にできないことができることである<sup>20)</sup> (ラッセルはこれを「行動主義」による「勇気」の定義と説明している)。危険な状況に立ち向かい克服するひとつの方法は、その中でもものを操作する活動ができるようになることであり、そのためには技術を学び熟練させることが適切である。山に登ったり、荒海で小船を操作したり、飛行機を操縦したりするなどである。こうして、恐怖から熟練へと移行する体験を通じて、恐怖が克服され、勇気が身につくとラッセルは考える。

先にも若干触れたが、不可思議なもの (the mysterious) に対する恐怖は大人でさえ持っている。歴史的にも、そのため様々な迷信がはびこってきた。「迷信は個人的にも社会的にも非常に危険な恐怖の形である」<sup>21)</sup> とラッセルは指摘する。中世の魔女狩りの例を指摘すれば、その危険性は明白である。不可思議であるのは、ひとえに無知によるのであり、そこに由来する恐怖感根気と知的な努力で解消できることを、子どものうちから感得させるべきである。そうすれば、不可思議さは、むしろ子どもの好奇心を発達させ、探究心を刺激し、社会発展へと向かう原動力ともなり得ると、ラッセルは主張するのである。

更に、子どもが不安を抱いて大人にしばしば尋ねるのが死の問題である。正統的信仰を持つ人はさほど困難を感じないであろうが、死後の生命を信じない人にとっては、答えるのが難しい問題である。ラッセルは、大人のほうから死の問題を子どもに持ち出すことには反対であるが、子どもが尋ねてきたときには、「目覚

めることのない眠り」<sup>22)</sup> だときっぱり説明すべきであると言う。子どもにこの問題をくよくよ考え込ませないことが肝要であるとするのである。

恐怖の問題の最後に、ラッセルは幼児を育てる大人へのアドバイスを述べている。子どもに恐怖を感じないようにさせるには、親や大人が恐怖を持ってはならない。人生は危険に満ちており、不幸への不安もあるであろうが、起こりうる不幸に対しては合理的な覚悟をすることが大事である。賢者は、避けられない危険は無視する一方で、避けられる危険に対しては用心深く、冷静に行動する。そうした生き方を示した上で、親は、子どもに広いものの見方と、生き生きとした多彩な関心を授けてやるのが大切である。そうすれば、子どもは大きくなってから、自分は不幸になるのではないかと思煩うことがなくなる<sup>23)</sup>。「完全な勇気は、多くの興味を持った人の中に見出される。彼は、自分の自我など世界のほんの小さな部分でしかないと感じているが、それは、自分を軽視するからではなく、いろいろ自分でないものを大事にするからである」<sup>24)</sup> と、ラッセルは述べている。

#### <今日的意義と実践の場から見た問題点>

幼児教育では原体験が大切だと言われている。近年、大人も経験する機会が乏しくなっている自然体験の中で、真っ赤な沈む夕日やどこまでも続く水平線などは、特に、子どもサイズで視野に入ってくるとき、大人が想像する以上に、子どもには偉大で絶対的なものとして目に映るであろう。また、そのとき、だれと一緒にその体験をしたのかという思い出が、幼児期の原体験として大切なのである。

ところで、幼児が本能的に恐がるもののひとつに暗闇がある。昨今は、明るく照明された部屋や街に慣れていて、暗闇に不安を感じやすい。幼稚園や保育所では、夏の宿泊保育の機会などに自然の中の暗闇を経験させるようにしている。ただし、単なる暗闇体験ではなく、暗さとともに、星空の美しさやキャンプファイヤーの明るさをも体験させ、それらが、自然の闇の深い暗さとともに、思い出に残るように配慮している。

大人が本能的に感じる緊張感や違和感の例として、言葉の通じない外国人に対するものがある。特に、肌の色や体格、あるいは宗教的・文化的背景による見慣れぬ服装などによって、一瞬大人の緊張感が高まるこ

とがある。例えば、遠足に行く電車で、見慣れぬタイプの外国人と乗り合わせた事例などである。A先生が緊張して目を逸らしたり、関わりたくないという態度を無意識のうちにでも示すと、回りの子ども達はそれを敏感に感じ取り、先生の周りに固まってしまう。

B先生が、特にその外国人と言葉を交わすというわけではないが、にこやかに、暖かな関心を持って受容的に対すると、そのことが子どもたちにもすぐに伝染し、降り際に「バイバイ」などといって手を振る子どもの姿が見られる。

死は、今の子どもたちにとって相当縁遠い問題である。ラッセル同様、現代日本の幼児教育の現場でも、一般に、幼児期の子どもに対し、大人の方から死の問題を持ち出すことには反対である。自然な園生活の中で、むしろ、生きるということやいのちを考えさせることを大切にしている。生き物を飼って、体温の暖かさや拍動を感じたり、餌を与えたり、小屋の掃除で排泄物の処理を体験したりして、積極的に生き物と関わらせている。当然、その過程で死に出会うこともある。「どうして起きないの」「なぜ餌を食べないの」などと子ども達は質問する。その場合、幼稚園でも、ラッセルのように「目覚めることのない眠り」と説明することが多い。今日、家庭でも死の経験が少ないので、園で飼っている小動物が死んだ場合、それをきっかけに、親子でいのちを考え、生と死について話し合う機会としている。

## 2. 真実を尊重する態度 (truthfulness) について

ラッセルは身体的・感覚的な勇気とは別に、真実を語ることに恐れを感じない性格の重要性にも言及している。子どもが習慣的に嘘をつく場合、それは、ほとんどすべて、恐怖心が生み出した結果である<sup>25)</sup>。厳しく育てられてきた子どもは、絶えず、叱られないかとびくびくしており、率直に振舞うことを恐れるようになる。そのような子どもは、大人が嘘をつくことを経験したり、大人に本当のことをいうのは危険だと知ったりすると、嘘をつけばよいと考えるようになる。逆に、賢明にかつ親切に取り扱われてきた子どもは、物怖じをせず、常に率直であり、真実でないことを口にしようという考えがそもそも頭に浮かばない。嘘を叱ったり罰したりする前に、嘘をつく必要がないように育てることが大切である。また、子どもに真実を尊

重することを求めるなら、大人も同じ態度を取らねばならない。子どもは様々なことを質問し、時には、大人にとって都合の悪い質問や答えるのが困難な質問—宗教に関する質問や難しい科学上の質問など—もする。それでも大人は、できる限り誠実に答えてやる必要がある。その際、今より多くのことを学ぶと、そうした質問の答えが自分で分かるようになると教えると、子どもの好奇心や知的向上心は大いに刺激される。また、こうして大人が真実を常に尊重する態度を示していると、大人に対する子どもの信頼が増加する。いんちきや偽善に満ちた現代社会で常に真実を語ることはある種ハンディキャップになることもあるが、このハンディキャップは、恐怖心を持たないという長所によって十分補われる、とラッセルは考える<sup>26)</sup>。

### <今日的意義と実践の場から見た問題点>

我々は思いのままにのびのびと表現したり活動したりする子どもを望ましいと思うが、そういう子どもは少なくなってきている。例えば入園前に、家庭で「○○していたら、幼稚園に入れてもらえない」であるとか、「○○できないと幼稚園に入れない」などと言われてくる幼児がいる。更に、「悪さをすると園長に叱られる」であるとか、「幼稚園をやめさせられる」と言って子どもを脅す家庭もある。そんな子どもは、入園後の登園時に、素直に「おはよう」の挨拶ができにくい。上手に挨拶しないと叱られるのではないかとびくびくした様子が見て取れる。中には、そんな子どもの母親が、「おはようございますと言いなさい」と言いながら、子どもの頭を押さえつけ、お辞儀を強いることもある。厳しく育てられてきた子どもは、絶えず、叱られないかとびくびくしており、自然で素直にふるまうことを恐れるようになるのである。

また、今日、何であれ、自分のやり遂げたいに目標に向かって、わき目もふらず夢中でチャレンジする腕白小僧は稀で、結果を気にして、そのプロセスを誰かにいちいち確かめてもらわないと不安な優等生的子どもが増えている。つまり、親や教師の顔色を窺って行動する子どもや、「○○してもよい？」と度々尋ね、許可や指示を得ないと行動できない子どもの増加である。こうした子どもが増えてきた背景には、恐らく、大人の許容範囲が狭くなってきていることがあると考えられる。幼稚園でも、新任の先生や転勤したばかり

の先生が担任する子ども達の中に、4月当初、そのような許可を求める姿がよく見られる。先生自身の緊張感が高く、失敗したくないという気持ちが強いいため、指示的な言葉が無意識のうちに多くなるのである。そうした教師の言葉に影響され、自分も先生の枠の中に留まろうとして、子どもは行動の許可を求めることになる。もちろん、ずっとそのままではなく、教師の緊張感が取れ、のびのびしてくるに従って、子ども達ものびのびする。子どもをのびのびさせようと思ったら、先生や親が自由に伸びやかでなければならない。

#### IV 子どもの遊びとそこで育つもの

##### 1. 遊びと空想

幼児教育の中心が遊びを通して子どもを成長させることであることは、今日、教育関係者共通の理解であると言えよう。幼児期の子どもは、遊びに没頭する中で、心身の成長を遂げる。すなわち、身体の力や機能、更には巧緻性を発達させる一方で、知識を身に付け想像力を広げ、仲間と様々に関わり、時には葛藤や喧嘩を経験しながら人間関係を学び、ルールの必要性和意義なども学んでいく<sup>27)</sup>。ラッセルも遊びの持つ様々な側面の意義を論じているが、そもそも子どもはなぜ遊ぶのかということや、遊びを通して育つのは何かという点について、殊に重要な見解を示しているように思われる。

まず、子どもはなぜ遊ぶのか。広く行なわれている見解のひとつは、そこで子どもは(人間のみならず、動物の子どもも)将来真剣にするようになることを予行演習しているというものである<sup>28)</sup>。モンロー(P. Monroe)の挙げている有名な例によれば、インディアンの子どもは大人を真似て、川で丸木に跨り手で水を掻くことで、将来大人のインディアンとして不可欠なカヌーを操る技術を予習をしていることになるという<sup>29)</sup>。また、ラッセルも認めているように、子ども達は、筋肉を使う新しい能力をつけてくれる遊びなら何でも(度を越さない限り)好むものである。ラッセルは、そうした説明が真実であることを認めつつ、しかし遊びの衝動の一切を説明できるものではないことを指摘する<sup>30)</sup>。

代わってラッセルが持ち出すのが、大人になりたいという欲望、すなわち幼年期の本能的衝動としての「力

への意志(will to power)」<sup>31)</sup>である。ラッセルによれば、子どもは年長者に比べて自分がいかに無力かを痛感し、大人たちと対等になりたいと願っている。そのため、子ども達は小さいときから年長者のすることをしたがるのであり、そこから大人の仕事や活動を真似る遊び、つまり「ごっこ遊び」が生じるのである。子どもが大人に対して抱くこうした「劣等感」は、教育によって適切に用いるならば、努力への重要な刺激となり得るのである。

ラッセルによれば、遊びの中での「力への意志」の現れには二通りがあるという<sup>32)</sup>。ひとつは、いろいろな物事の仕方を学ぶ場合であり、いまひとつは、空想(fancy)である。前者の有益性は疑いようもないが、後者については必ずしも価値が認められているわけではなく、場合によっては、挫折した大人の白昼夢のごとく、実践の努力から人間を遠ざけて有害であると考えられる場合もある。しかし、ラッセルは、後者についても意義を認めるだけでなく、人類史的に見ても、また個人の生活史ないし成長史においても、より早く発達するのは想像力(imagination)であると強調する。子どもの空想は、決して適わぬ現実の代替物ではなく、子どもは実際自分も力を得てそのようになりたいと切に願っているのである。ごく幼い時に自分を青ひげ(ペローの童話に出てくる殺人鬼で、6人の妻を殺し、7人目の妻にその罪を発見される)やジャックと豆の木の巨人に見立てて粗野な満足を得ていた子どもも、適切な知識と技術を行く手に置いてやりさえすれば、いつまでもそうした空想の段階に留まっている心配はない。後年には、科学上の発見や芸術作品の制作や、教育活動や、その他無数の有益な活動のいずれかによって洗練された満足を得られるようになるのである<sup>33)</sup>。「教育の本質は、本能を抑圧することではなく、本能を伸ばすことにある。人間の本能は実に漠然とした(vague)ものであり、種々様々な仕方でも満足させることができる。(中略) 知育の秘訣は、性格に影響を及ぼす限りでは、本能を有効に使えるようにしてくれる技術を人に授けることにある」<sup>34)</sup>。つまり、遊びの中で子どもは自分の将来の在り方や姿を様々に思い描き、空想の上で試してみる一方で、身体的・技術的な力を少しずつ発達させていくのであり、両者が相俟って、子どもの「力への意志」の向かう方向が定まり、徐々に実現していくのである。

## 2. 競争的な遊びについて

ラッセルは、子ども達が大きくなるに連れ、遊びがだんだん競争的になってくることに関し、独自な見解を表明している。この点を、遊びを取り上げた最後に概観しておきたい。

子どもは小さいうちは大体一人で遊んでいる。幼稚園で新しく入園した3才児は、集まって遊んでいるように見えても、実際は同じ場所で、個々の子どもがそれぞれ勝手に遊んでいるに過ぎない。ところが、約1年かけて、子ども達は小さな集まりになって遊ぶことを覚え、小学校入学前の5才児クラスになると、かなり大掛かりな集団での遊びが可能となる。ラッセルも、集団遊びができるようになるとその方がはるかに面白いので、一人で遊ぶ楽しみが急速に色褪せていく実態を指摘している。学校では、特にイギリスの上流階級が多く通う学校（パブリックスクールが代表的）では、フットボールやラグビーなどの団体競技が協力を中心とした団体精神を育てるものとして推奨されている<sup>35)</sup>。しかしラッセルは、こうして育まれる協力は、人と争う形での協力であり、戦争で必要とされる協力であるに過ぎないと主張する。このことは、例えばウエリントン将軍の言葉である「ワーテルローの戦いの勝利はイートン校のグラウンドで得られた」などによっても、ある程度裏書きされていると言えるであろう。更に、団体競技で人の支配に従った経験があるものだけが人を支配することができる、という考え方が強く支持された。第1次世界大戦ではパブリックスクールの出身者が将校として活躍し、またその仲から多くの戦死者を出した。そのことが、パブリックスクールの教育がエリートや指導者の養成において有効であることの証左と見なされている。これに対しラッセルは、近代社会は、科学のおかげで、政治においても経済においても競争の変わりに協力することが可能となり、半面、科学のゆえに競争（特に戦争）は、はるかに危険なものとなってきている。そこで、協力して、自然を相手に挑むことを教えるのが適切であると力説する<sup>36)</sup>。先に考察した勇気についての考え方と深く関連し合っているが、反戦・平和主義者ラッセルらしい考え方である。

＜今日的意義と実践の場から見た問題点＞

遊びを友達と一緒に発展させることができるようになるのは、およそ5歳くらいである。言葉の力やコミュニケーションの能力が高まることによるのであり、また、そうして集団的で発展的な遊びをすることにより、言語を使ったコミュニケーション能力が一層発達する。例えば、お寿司屋さんごっこを例にとろう。3才児は、先生が準備してくれた寿司の玩具をそのまま使い、お店の人とお客になりきって、ひたすら遊ぶ。ところが、5才児になると、よく連れてもらうのか、回転寿司屋遊びにしようと言い出し、遊びを進めていく中で、より本物らしくしようと工夫する。例えば回転する台を考え、更にその台をどうしたら回せるかを相談する。更に、回転寿司には値段の違う皿があるので、年下のクラスへ皿を借りに行く。こうして本物により近づけて遊ぼうと工夫することは、ラッセルのいう「力への意志」の発動による。その過程で、子どもの様々な力が育つのである。更に言うならば、個人的な「力への意志」から集団的な「力への意志」への発展でもあろう。

競争的な遊びについては、ラッセルはパブリックスクールとそこでのフットボールやラグビーが念頭にあって、競争的な遊びを直ちに戦争とつなげて考えている。今日の日本の幼稚園や保育所では、競争的な遊びを否定的には捉えず、むしろ、その中で育つのは何であるのかをいろいろ考えながら行なっている。典型的なものはリレーである。子ども達は当初強いものが集まってチームを作りたがる。その一方で、「負けるから嫌だ」とか、「〇〇ちゃんと一緒だと勝てないから、同じチームに入りたくない」などと言ったりする。しかし、続けていく中で、いろいろな仲間のいるチームで協力することを覚える。例えば、「△△チャンを〇番目にしよう」、「僕は遅いから応援を頑張ろう」「□□ちゃんの遅い分を僕が頑張ろう」などというように。ゲームや競争的な遊びも、単に競うことだけを目的とせず、皆でやることやその中で力を出し切ることを学ばせる機会とするならば、それはまた意味のあることであろう。もちろん、ラッセルの言うように、個人が自然相手に自分の目標を目指してチャレンジすることも大変意義深い。しかし、競争的な団体遊びでしか身につかないものもある。チームのために個人として頑張ったり工夫したりすることであり（リレーでバトン

のうまい渡し方を考えたり、脚を強くしようと、いつもは自転車に乗せてもらって通園しているのを、歩いて帰るようにするなど）、ルールに従うことの重要性を身をもって知ること（いかにチームを勝たせたくても、バトンを投げ渡したり、コースを横切って近道をしてはいけないことなど）である。また集団としての競争的な遊びは、一人での遊びよりもはるかに楽しいので、子どもが自分から進んでするという長所が認められるのである。

## V 建設的であること (constructiveness)

前章で見たように、子どもにとって遊びの最たる意義は、「力への意志」つまり大人のようにになりたいという子どもの根源的欲求ないし本能を、子どもがその中で存分に発揮することができ、心身の豊かな成長をもたらされるところにあった。

こうした子どもの本能は、他の動物の本能と異なり、本来きわめて曖昧なもので、ラッセルによれば、教育と機会によって様々な方向へ向けることが可能である。（この場合の「機会」とは、今日の幼児教育の用語である「環境」と大きく重なるものと考えてよいであろう）。そこで、自然のままの粗野な本能を放置するのではなく、技術を与え、学ばせることで、子どもの本能に訓練と洗練をもたらすことが大切だとされる<sup>37)</sup>。更にラッセルは、「適切な技術を与えることで子どもは道徳的な人間になり、悪い技術を与えるか、あるいは全く与えないことで善からぬ (wicked) 人間になるだろう」とも述べている。幼児期における道徳性の芽生えを適切に育てることに関心のある我々にとって、きわめて興味深い言葉である。

子どもの本能の中心にある「力への意志」は、通常、より困難なこと、より高度なことを実現することを好む。例えば、ひとは普通の釣りよりも毛ばりによる釣りを、木に止まっている鳥を撃つよりも飛んでいる鳥を撃つことを、平面幾何よりも解析幾何を一般に好むものである。つまり、より困難で「力への意志」をより高い次元で満足してくれるがゆえである。幼児期について見るならば、子どもはものを作ったり壊したりして楽しむ。通常は作るより壊すことが容易なので、親や兄ないし姉が作った砂山や積み木を壊すことが先行する。壊すのが楽しいのは、そのものの形状を自分

が変更したこと、つまり、それだけの力が自分にあることを認め、それを喜んだり楽しんだりするのであろう。しかし、一人で砂山を作ったり積み木を積んだりできるようになると、そうした「建設 (construction)」に熱中し、もはや「破壊 (destruction)」を喜ばなくなる。ラッセルに言わせれば、新しい技術が同じ衝動から生まれた活動を一変させるのである<sup>38)</sup>。

建設的な喜びの重要性は、そうした「力への意志」の満足に加えて、そこから様々な徳性 (virtues) が自然と生じてくるところにある。例えば、子どもが自分の作ったものを壊さないで欲しいと頼むとき、その子に、他の人が作ったものも同様に壊してはいけないことを容易に理解させることができる。このことは、延いては、他人が労働によって産み出したものを尊重する心へとつながる。また、困難なものを作ること—たとえば、これまで自分が作ったことのない高さに積み木の塔を築き上げる—に挑戦する中で、子どもは忍耐力 (patience)、根気 (perseverance)、観察力 (observation) などの徳性を伸ばす機会を得る<sup>39)</sup>。そもそも、そうした徳性をいくらかでも身に付けることなしに、子どもが大きな挑戦に成功することは殆ど不可能なのである。子どもがやってみたくなる大きな挑戦は、こうした徳性を自然のうちに発達させる刺激 (incentive) となる。その際、大人は、まず自分で作ってみて、どうすればできるかを示して子どもの野心 (ambition) を刺激するに止め、あとの建設は子ども自らの努力に任せなくてはならない。

道具や玩具を使って体験する建設の喜びのほかに、生物を相手にした建設の喜びを経験することも大切である。小さな子どもは庭に入ると、最初は美しい花を次々と摘み取ることに喜びを覚える。しかし、子どもが少し大きくなれば（ラッセルは3歳位と言う）、庭の一隅を与えて種を蒔かせるようにする。種が芽を出し、花が咲くと、自分の花は素晴らしいものに見え、そのとき子どもには、大人が育てている花も大切にしようという気持ちが自然に育つのである。また、小さいときから自分のペットを飼い、愛情を込めて世話をし、生命の発達を見守る体験をしてきている子どもは、生命の価値を深く感じることができ、動物の生命を尊重することを容易に学ぶことができる<sup>40)</sup>。更にラッセルは、自分の子どもを苦勞して育て上げた人の心には人命尊重の気持ちが強く宿っているだろう、とも言

う<sup>41)</sup>。加えて、建設的な衝動が十分に発達している親は、子どもの世話をより積極的にしようとするであろう。教育において「建設性」に注意を払うことは、次世代をよりよく育てる上でも大変重要なことになる。

更にラッセルは、演劇や合唱など、非物質的で精神的な建設の喜びについても論じている。また、高学年になると、社会をより善きものにしようとする「社会的な建設性 (social constructiveness)」を伸ばすことの必要性についても論じている<sup>42)</sup>。教育の目的は、社会的に見た場合、社会や文化の次の世代への継承であるが、そこには既存社会の抱える問題点の克服や改善が含まれていなくてはならない。そのためには、社会の問題点を看取できるだけの知識や知性が要求されることになるのであり、また、既存の体制を批判することを恐れず、率直に自分が真実であると思うことを発言する勇気も必要となってくる。こうして、ラッセルの言う「建設性」は、幼児期から青年期、更には成人後の生き方までも貫きわめて重要な資質である。しかもその基盤は幼児期に培われる。今日、幼児教育も含めて、我が国の教育の全体で重視される「生きる力」が、もし単に個人が社会変化に適合して生きていく力であるに止まらず、社会全体の在り方に深く関わり、人間全体のよりよき生き方を追求していくものであるとすれば、それはラッセルの言う「建設性」がその重要な内容をなすといっても過言ではないように思われる。

#### <今日的意義と実践の場から見た問題点>

「建設性」を洗練させ発展させることに関し、積み木の例で、ラッセルは、大人がやって見せて、子どもの野心 (ambition) を引き出すことの重要性を述べているが、その際、子どもがそちらの方向へ向かうよう暗示や指示を与えるなどして、ことを急いではならない。大人の側でもゆとりが必要であり、子どもがその気になるまで待たなくてはならない。いくら大人がやって見せても、こどもがその気にならないこともある。機が熟すのを待つことは、極めて大切なことである。

ラッセルは、生物を相手にした「建設性」についても述べていた。幼稚園や保育所では、3歳児には苗を植えさせ、ほぼ確実に実がなるようにして、収穫の喜びを体験させる。ところが5歳児になると、種から蒔

かせる。5粒の種を蒔いて、ひとつしか芽が出ないこともある。水が足りなかつたり、逆にやりすぎて枯らせることもある。せっかく実がなり始めても、カラスがやってきてついばんでしまうこともある。建設性を学ぶ中で、思いがけない出来事との遭遇や失敗の体験をさせることも大切である。というのも、そこで子どもは工夫をするからである。大人の知恵を借りることも知る。カラスが来ないように、カラスが恐がりそうなものをつるす。大人に手伝ってもらってネットを張る。それでもカラスはネットの下から入ってきて、まんまと裏をかかれることもある。大人と一緒に考える体験や、大人でも失敗することがあることを知るのも大切な体験である。そうした失敗の経験が、子どもの「建設性」をよりしなやかでかつ強靱なものに育てていくと考えられる。

ところで、幼稚園や保育園の「園」とは、周知のように、フレーベルの Kindergarten における Garten、つまり「庭」の意味であり、延いては子どもと大人がそこで共に過ごすことで、大人も子どもも双方が育ちあう場所、更にはお互いに育て合う場所を意味しているのである。今後、幼稚園と保育所が認定こども園となって発展的に統合されていく可能性が強いが、その際にも依然として「園」という言葉が残る背景には、こうした「建設性」が育まれる場所という意味合いが含まれているように思われる。

## Ⅵ 他の子どもの重要性

### 1. わがままと所有に関して

ラッセルは、子どもが自然な習慣を通じて徳性を身につける上で、他の子どもの達との交渉の必要性や重要性を論じている<sup>43)</sup>。例えば、年上の力の強い子どもと小さな弱い子どもが一緒に放置されると、大きい子どもは小さい子どもが使っている玩具を奪ったり、大人の注意を自分が独り占めにしたりして、小さい子どもの失望にはお構いなしに自分のしたいようにする。ブランコや一輪車に自分が乗ろうとして子供同士が争うのも、幼稚園などで、よく見かける光景である。いずれも、「力への意志」を持ち、力を発揮しようと望む子どもたちには自然な行動であろう。このような場合、大人や保育者はどう対処すべきか。ラッセルは次のように言う。

「人間の自我 (a human ego) は気体のように、外部からの圧力によって押さえつけられない限り、常に拡張しようとする。この点で、教育の目的は、外部からの圧力が、けったり、なぐったり、罰したりという形ではなく、子ども自身の心の中で、習慣や観念や同情という形を取るようにさせることにある」<sup>44)</sup>。

大きな子どもが小さな子どもを虐げた場合、大きな子どもの行動を矯正しようとして罰を加えるのはもっての外である。また、我慢して相手に譲る「自己犠牲」を教えて実践させ、「道徳的」解決を図ろうとすることもあるが、それもラッセルは適切でないとする。自分が譲ったか、あるいは譲ることを余儀なくされた場合、譲った相手に対して幾ばくかの恨みがましい気持ちが残ったり、譲った相手に感謝を要求する気持ちが消えなかったりするからである。ラッセルによれば、必要なのは「公平の観念」である<sup>45)</sup>。プランコヤー輪車の場合、大人が「かわりばんこ」という制度を作ると、自分だけ楽しもうとする子どもたちの衝動が驚くほど速やかに克服されるとラッセルは述べているが、それは我々もよく知るところである。「公平」という新たなひとつの観念が、力を求め行使しようとする子どもの衝動に洗練をもたらした顕著な例である。これはしかし、他の子どもがいる所でないと、真に理解させることは難しい。というのも、大人相手では、力量的にあまりにも差があり過ぎるうえに、通常大人は争わずに子どもに譲るので、何かを求めて競ったり争ったりするという経験が成り立たないからである。

ラッセルはまた、公平の観念と深い関係にあるものとして「所有(物)の観念 (sense of property)」<sup>46)</sup>を挙げている。所有欲は子どもに根深い欲求であり、何かを所有させることは、用心深さやものを大切にす態度を育て、破壊衝動を抑制する。また、子どもに自分で作ったものを所有させることにより、建設への衝動を促進することができる。しかし他方、過度な所有欲が後年まで持続するならば、けちん坊や欲張りをつくり出し、様々な弊害や危険を伴う。そのため、所有に関しては、子どもが所有物を与えられないことで挫折感を感じないよう気をつけることは必要であるが、同時に、子どもの注意をなるべくものの所有を伴わない喜びに向けてやり、他の子どもに対しては、気

前よく振舞う喜びを教えるようにすべきである。このように所有についても、他の子どもがいるところでないとい、真に理解させるのは難しいのである。

## 2. 他の子ども達との関係

周りに少し年上の兄や姉がいる子どもは、歩いたり話したりするようになるのが早い。子どもは、生後数ヶ月も経つと、周りの人を真似ようとするが、大人の歩いたり話したりする能力は1歳前の子どもにとって完璧すぎ、かえって手本になりにくい。それに比べて、3歳の子どものやっていることは、1歳の子どももやってみたいと思えることであったり、あるいは自分にもできそうであったりするの、野心を大にくすぐられるのである。このように、年上の子どもが周りにいることの利点は、達成可能な野心を与える点にある<sup>47)</sup>。また、小さな子どもは大きな子どもの遊びの仲間に入れてもらいたがるが、その際、年上の子どもは、小さな子どもに対し大人がするような思いやりは示さず、ごく無造作にかつ自然に振舞う。小さな子どもは大きな子どもの遊びについて行こうとして大変な努力をし、これまでできなかったことにも挑戦するのであり、そこで様々な力が伸びるのである。また、時として、大きな子どもの要求で下積み役を務め、そうした立場から協力するという大事な経験もする<sup>48)</sup>。

年下のこども達との交渉も役に立つ。ラッセルによれば、大人のそばにいただけでは、強いものが弱いものを取り扱う上で求められる徳性が身につかない。そうした徳性は、小さな子どもがいるところでしか実際に発揮する機会がないのである<sup>49)</sup>。例えば、小さな子どもが使っている玩具を力で取上げてはいけなとか、小さな子どもの失敗にひどく怒ってはいけなとか、自分の持ち物を小さな子には気前よく貸してやらなければならないとか、小さな子どもを泣かせたときには良心の咎めを感じなくてはならない等である。通常、子どもを鋭い口調で叱ることは避けねばならないが、小さい子どもを相手に横暴な振る舞いに及んだときには、すぐにその場で、厳しく叱ることも必要である。あるいは、小さな子どもにした不親切な振る舞いと同一ことをその子にしてやるのも適切な指導である。なぜそうしたかを説明し、自分がされたくないことは他の子どもにもしてはいけなことを理解させるべきである<sup>50)</sup>。道徳教育は直接的かつ具体的であるこ

とが必要で、自然に発生した状況から出てくるのでなければならぬし、また、その事例に限って行なわれるべきである。抽象的な道徳教育は子どもには理解もされなければ、役にも立たない。子どもが、のこぎりの使い方を教わるのと同じように、「いま、物事のやり方を教わっている」<sup>51)</sup>とを感じるようにすることが大切なのである。その際、子どもが手本とする大人が真によき模範になっているべきことは言うまでもない。

子どもにとって、年上や年下の子どもとの関わりにも増して重要であるのは、同年輩の子ども、つまり対等な相手との関わり方を学ぶことである。ラッセルは、現代社会においては、職業や財産や門地などに関わらず、互いに相手を人間として対等な者と認めて関わるのが何よりも重要であることを指摘し、それを真に身につけるためには、小さいうちに同年輩の子ども達との付き合いの中で、対等な関係とは何かを身をもって学ぶのが最も適切であるとする<sup>52)</sup>。また、ある子どもが仲間内で占める重要性は、その友達の評価いかんで決まってくるのであるが、彼が成功するかどうかは彼の性格や腕前次第である。自由な競争や対等な協力において自発性を触発され、自分の様々な力を適切に発揮する仕方を覚えるには、同年輩の仲間と共にいる時に優るものはない。これらはすべて、人間関係における「建設性」の発揮であり、伸長であると言いうことができよう。

更に、子どもの心身の成長は大量の遊びを必要としている。ラッセルによれば、2、3才を過ぎると、他の子ども達と一緒にする遊びでなければ十分なものにはならない<sup>53)</sup>。大人をはじめとした、大きい相手との遊び、つまり「遊んでやっている」、「遊んでもらっている」という関係では、遊びとしての真剣さに欠け、両者においておそらく退屈が生じ、長時間に亙る熱中した遊びとはならない。そうした意味でも、他の子ども達、取り分け同年輩の子どもたちの存在は、子どもの健全な成長にとって極めて重要なのである。

#### <今日的意義と実践の場から見た問題点>

子ども達が遊具をめぐる争い合う時には、奪い合う経験を十分に経た上で、「公平」や「かわりばんこ」に気づいたり教えられたりすることが必要である。ひとつには、自己主張の経験を十分にすること（この場合は、自分がそれを使いたいと相手に対し主張するこ

と）が必要であり、いまひとつには、そうした自己主張をし合う中で、相手も自分と同じような思いや願望を持っていることを知る事が大切なのである。

幼稚園の遊具には、全員に対しわずかな数しか備えていないものもある。高価だからということもあるが、敢えてそうしている場合もある。自分が使えるときを辛抱強く待つ体験—豊かな社会である今日、なんでもすぐに与えられる家庭では、なかなかできない体験である—が重要であり、また、どうしたら自分が使えるかをいろいろ考えたり工夫したりする機会ともなるからである。

今日、幼稚園や保育園ではしばしば縦割り学級や兄弟学級が行なわれている。遠足で歩道のない道を歩くことがある。4歳児と5歳児が手をつなぐ場合、5歳児が車道の方を歩いて4歳児を気遣う。そのような体験をした4歳児は、3才児と手をつなぐ場合、教師が指示しなくとも、自然と自分が車道側を歩いていることが多い。もちろん、3才児を気遣っているのが、同時に、大きいものの特権として、車道の側を歩いているのである。年上の子や年下の子とも関わったこうした体験は、少子化で子どもの数が減っていて、しかも近隣で異年齢の遊び集団が成り立ちにくい今日のような時代には、幼稚園や保育所に行かないと経験することが極めて難しい。

## Ⅶ 愛情について

愛情に満ちた同情心豊かな子どもを育てることは道徳教育の重要な目標であると考えられる。ただし、愛情を直接教え込むことは不可能であり、無意味である。かつて英国では、親を愛することを義務として教えながら、当の親は些細なことにも平気で子どもに笞打ちなどの体罰を与えた時代があった。そのような中で、子どもの親に対する心からの愛着や愛情が育つはずはないのである。ラッセルは言う、「正しい愛情は、成長期の子どもの適切に取り扱うことから自然に生まれてくる成果であるべきであって、種々な段階を通して意識的に目指されるものであってはならない」<sup>54)</sup>。親が思慮深く子どもに対すれば、子どもは親の愛情—子ども達がそばにいて、いろいろなことをするのを喜びとする暖かな愛情—を感じるものである<sup>55)</sup>。子ども達は、何か楽しい遊びをしているのでない限り、親が来

れば喜び、立ち去れば悲しむ。困ったことがあれば親の助けを求める。子ども達は思い切った冒険を試みるが、それは背後にある親の保護を当てにしているからである。一緒に遊んでくれたり、新しいことのやり方を教えてくれる親を、子どもは好きになるであろう。親としてはそれで満足すべきであって、情緒的な反応を求めてはならない。というのも、親は子どものことを念頭において行動しなければならないが、子どもは自分自身と外の世界を念頭において行動し、知恵と身長を伸ばすことが役割だからである。子どもがその役割を果たしている限り、健康な親の本能は満足するものであり、満足すべきなのである<sup>56)</sup>。

同情については、身体的・本能的な共感が根底にあるとラッセルは考える。小さな子どもは、兄弟や他の子どもが痛がったり、泣いたりしているといたたまれなくなる。こうした土台の上に、より洗練された共感が築かれる。世の中の様々な悪や残酷な出来事については、ある段階で子どもはその存在を知らねばならない。しかし、それはある程度の平静さをもって直面できる年頃を待って行なうべきであり、それを知るときには、避けられる苦しみを人に加えるのはもちろんのこと、それを見過ごすことさえ恐ろしいことだということ確信を子どもが抱くよう教えるべきである<sup>57)</sup>。また、そうした現実の世界の悪や残酷さを子どもが最初に知るときには、子どもが自分を加害者ではなく被害者と同一視するような事件を選ぶべきである。戦争の話をするにおいても、同情がまず敗者に寄せられなければならない<sup>58)</sup>。そうした様々な悪は、それと戦うことができるし、無知と自制の欠如と悪しき教育の結果生じたのであるというように感じさせるべきである。こうした本能的な芽生えがあれば、広い同情心を養うのは、後は主に知的なことがらとなってくると、ラッセルは考えている。

最後にラッセルは対等人への愛情について論じる。先にラッセルは対等な相手との関わり方を学ぶことの重要性を強調していたが、同様に、ラッセルによれば、これこそが愛情のうちで最上のものであり、それは子ども達を幸福で自由にし、親切で包み込んでやることによって生じる。子ども達は自発的にすべての人と仲良しになり、またほとんどの人はそれに応えて子ども達と仲良くするであろう。ラッセルの考える性格の教育は、子どもを幸福にし、勇気を持った存在に

することを指すものであり、人を信頼する愛情深い性質は抗いがたい魅力をその持ち主に与え、期待通りの反応を呼び起こすことになるであろう。これがラッセルの愛情についての考え方である。

＜今日的意義と実践の場から見た問題点＞

ここにラッセルが「思慮深い親」の役割として描写するところのものは、幼稚園や保育園の先生の役割でもある。前頁末に示したラッセルの見解において、「親」を「教師」に入れ替えると、次のようになる。「教師が思慮深く子どもに対すれば、子どもは教師の愛情—子ども達がそばにいて、いろいろなことをするの喜びとする暖かな愛情—を感じ取るものである。子ども達は何か楽しい遊びをしているのでない限り、教師が来れば喜び、立ち去れば悲しむ。困ったことがあれば教師の助けを求める。子ども達は思い切った冒険を試みるが、それは背後にある教師の保護を当てにしているからである。一緒に遊んでくれたり、新しいことのやり方を教えてくれる教師を、子どもは好きになるであろう」。教師・保育士はしばしば子どもたちの親代わりといわれるのは、こうした役割を期待されてのことである。

悪や残酷さを、現実には友達などの知人が直面した恐れ、悲しい出来事—例えば交通事故に遭う、酷い病気になる、あるいは海で溺れるなど—を自分の身に引き移して感じ取らせることは、小さい子どもには難しいし、インパクトが強すぎもする。むしろお話を通して、登場人物に思いを寄せ、そのあたりから考え始めさせることが適切であろう。『かちかち山』や『さるかにがっせん』には、狡さや残酷さなど現実の様々な悪の存在が語られている。と同時に、悪が最後まで勝利を占めることはないということも示されている。また、たとえ残酷な内容を含んでいても、それはあくまでお話の中のことなのである。子どもが成長していく中で、そうした物語で読んだ悪の存在が、実際に起こる様々な恐ろしい事件や事故と重なり合って、子どもの心には現実にも悪が存在するということが自然と受け入れられる。と同時に、自分はそうした悪を避けよう、避けなければならない、という道徳性が芽生えるのである。

対等人への愛情の重要性は、ラッセルが述べている通りである。近年は、親や教師がトラブルを嫌い、形式だけの仲のよさを教え込むことが多い。けんかを

しても早く仲直りさせようとして、子どもが納得してはいないのに、すぐに「ごめんなさい」を言わせたり、握手をさせたりする。しかし、それでは、相手のことをよく理解もせず、心からの納得もなしに、形だけ仲直りしたに過ぎない。そうではなく、様々な葛藤を経験した上で、相手の思いを理解し、共感や愛情を持って、心からの言葉—感謝、ねぎらい、詫びなど—を掛けられるようになることが大切なのである。子どもが生活の中で、自分で判断して「ありがとう」とか「ごめんなさい」などの言葉を自然に使えるようになることが望ましい。

## VIII むすび

以上、ラッセルの『教育論』を構成する主要な柱について、若干の組み換えや解釈を交えながら略述し、その今日的意義と幼児教育の現場から見た問題点を併せ論じてきた。

ラッセルの教育論の意義は、子どもの育ちゆく力を「力への意志」と「建設性」として捉え、その力動的な機能を示す中で、「善き人間」・「理想的人間」として求められる諸資質を、強制によらず、習慣として、子どもとしての幸福な生活を送る中で獲得・強化させてゆく道を示したことであろう。文部科学省の「生きる力」が結局のところ昔からの知育・徳育・体育に後退してしまった今日にあって、ラッセルが示したダイナミックで立体的な子どもの成育の道筋とそこで獲得される諸力や諸資質は、「生きる力」という言葉の含意としてきわめて相応しいものと筆者には思えるのである。

ところで、我々は問題のある子どもを見てしばしば「親の顔が見たい」と言ったり、あるいは何か重大な犯罪が行われたときに犯人がどのような幼児期を過ごしたのかを問題にしたりする。そのように言ったり問題にしたりすることがすべて適切かどうかは議論のあるところであるが、それでも、こうした言い方が幼少期にその子と関わった人の責任と幼少期のしつけの重大性を示唆している点は、間違いがないと思われる。

既に指摘されているように<sup>60)</sup>、「しつけ」には、「躾」という文字で表される行儀作法や、それが身につく外に現れていることを意味すると共に（英語なら breeding に当ろうか）、着物の「仕付け」に由来する

意味が含まれている。即ち、仮縫いの糸が、着物が出来上がるまで全体を整えておき、できあがったときに取り去られるように、子どもが一人前になるまでその子どもの言動や生き方全般を方向付ける、親や周囲の大人による指導を意味するのである。

幼少期の「しつけ」は、仕付け糸と同様に、かける場所が大事である。不要なところにしつけをかけてはならないし、しつけがなければ締めりのない着物になる。よいしつけをかけるには、子どもをよく見ないといけない。次に子どもとどのような体験をするかを考えながらかけるべきである。つまり、新たな体験を共有する中で、少し先、明日の一步を見ながら、建設性や「力への意志」を子どもが発揮すべき方向を考えながら、適切なしつけをかけていくべきである。

更に、しつけは、かけることも大事であるが、取り去るときがより重要である。しつけは、これを受けた本人自身が、糸を取り去られても自立できるように、適切な時期に、本人に気付かれないように、さも自らが取り去ったかのように、取り去ることができなければならない。

昔から「育てたように子は育つ」と言われるが、しつけは、外した後も、これを受けた当人の中で自然とその大きな方向性が保持され、意識せずともそれが発動し、活かされながら、当人が選び取った方向へ歩を進めていくのを助けるものでなければならないのである。こうした日本古来の「しつけ」観とも、ラッセルの『教育論』の方向性は大きく重なり合うものと考えられる。

## 注

- 1) 文部科学省が「生きる力」を言い始めた当初は、グローバル・エイジを迎え、急激な社会変化への対応の必要から、個人としても問題を見出したり、解決したりする問題解決能力や自ら学び、自ら判断する力の育成に力点が置かれていた。しかしその後次々と総花的に内容が付け加わり、全体としては結局旧来の知育、徳育、体育とそのバランスというスタティックな観念に戻ってしまい、かえって「生きる力」という言葉のイメージとはかけ離れてしまったように思われる。
- 2) On Education, Bertrand Russell, George Allen

& Unwin Ltd., London, 1926

ラッセル『教育論』、安藤貞雄訳、岩波書店、1990年。

引用注では安藤訳の頁数を示す。安藤訳は、参考にはしたが、原著に照らし、改めたところもある。

- 3) ラッセル『教育論』、安藤貞雄訳、岩波書店、1990年、102頁。
- 4) 同上書 89頁。
- 5) 同上書 93頁。
- 6) 同上書 90頁。
- 7) 同上書 92頁。
- 8) 同上書 93頁。
- 9) 同上書 96頁。
- 10) 同上書 97頁。
- 11) 同上書 99頁。
- 12) 同上書 125頁。
- 13) 同上書 60頁。
- 14) 同上書 61頁。
- 15) 同上書 104頁。
- 16) 同上書 103頁。
- 17) 同上書 105頁。
- 18) 同上書 108頁。
- 19) 同上書 111頁。
- 20) 同上書 117頁。
- 21) 同上書 120頁。
- 22) 同上書 122頁。
- 23) 同上書 125頁。
- 24) 同上書 69頁。
- 25) 同上書 64頁。
- 26) 同上書 172頁。
- 27) 文部科学省『幼稚園における道徳性の芽生えを培うための事例集』。
- 28) 同上書 127頁。
- 29) P. モンロー、『教育史概説』、川崎源訳、理想社、1957年、17頁。
- 30) ラッセル『教育論』、127頁。
- 31) 同上書 127頁。
- 32) 同上書 128頁。
- 33) 同上書 134頁。
- 34) 同上書 133～134頁。
- 35) 同上書 135頁。
- 36) 同上書 137頁。
- 37) 同上書 140頁。
- 38) 同上書 143頁。
- 39) 同上書 143頁。
- 40) 同上書 145頁。
- 41) 同上書 146頁。
- 42) 同上書 148頁。
- 43) 同上書 188頁。
- 44) 同上書 152～153頁。
- 45) 同上書 153頁。
- 46) 同上書 157頁。
- 47) 同上書 189頁。
- 48) 同上書 190頁。
- 49) 同上書 192頁。
- 50) 同上書 183～184頁。
- 51) 同上書 192頁。
- 52) 同上書 193頁。
- 53) 同上書 194頁。
- 54) 同上書 197頁。
- 55) 同上書 177頁。
- 56) 同上書 206～207頁。
- 57) 同上書 213頁。
- 58) 同上書 214頁。
- 59) 同上書 198頁。
- 60) 例えば『幼児期』、岡本夏木、岩波書店、2005年。

